第四講　演習問題（4）

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は現代かなづかいでもよい。なお、設問の都合で訓点を省略してある箇所がある。

太宗問魏徴曰、比来朝臣都不論事、何也。徴対曰、陛下虚心採納。①誠宜有言者。然古人云、未[信]Aゼラレ而諫、則謂為謗己、[信]Aゼラルルモ而不諫、則謂為尸禄。但人之才器各有不同。懦弱之人、懐忠直而不能言、疎遠之人、恐不[信]Aゼラレ而不得言。懐禄之人、慮不便身而不②敢言。③所以④相与緘黙俛仰過日。太宗曰、誠如卿言、朕毎思之。人臣欲諫、⑤輒懼死亡之禍。⑥与夫赴鼎鑊、冒白刃、亦何異哉。故忠貞之臣、非不欲竭誠者、敢竭誠者、乃是極難。所以

禹ノ拝二セシ昌言一ヲ、豈ニ不レラン為レナラ⑦此ガ也。朕今開二キテ懐抱一ヲ、納二ル諫(かん)諍(さう)一ヲ。卿等無下カレ労二シテ恐懼一ヲ、⑧遂不中ル極言上セ。

（『貞観政要』による）

注
○太宗――唐王朝第二代皇帝。広く人材を登用し諸制度を整え「貞観の治」と呼ばれる太平の世を築いた。
○魏徴――太宗に仕え諫議大夫などを歴任した。太宗に諫言することで有名であり、そのやりとりは『貞観政要』に多く載せられている。
○諫――目上の人の悪事や欠点などについて、忠告して改めさせること。
○尸禄――給料をもらうだけで職責を果たさない官僚。
○懦弱――臆病でいくじがないこと。　○疎遠――親密でないこと。
○懐禄――官職にすがりついて失職を恐れること。
○緘黙――口を閉じて黙っていること。　○俛仰――他人に同調して逆らわないこと。
○鼎鑊――罪人を処罰する刑具。　○冒白刃――敵の軍勢に突入すること。
○禹――夏王朝の伝説上の創始者。理想的な政治を行ったと言われる。
○昌言――道理にあった正しい諫言。　○懐抱――心の中。
○諫諍――つよく諫める言葉。　○極言――思う存分に発言すること。

問一　傍線部①「誠宜有言者」を送りがなも含めて全文ひらがなで書き下し文にせよ（送りがな部分は区別しなくてよい）。

問二　傍線部②「敢」、③「所以」、④「相与」、⑤「輒」、⑧「遂」の読みを送りがなも含めてひらがなで記せ。

②＝　　③＝　　④＝

⑤＝　　⑧＝

問三　傍線部⑥は「夫の鼎鑊に赴き、白刃を冒すことと、亦何ぞ異ならんや」と書き下せる。これに返り点を施せ。

与 夫 赴 鼎 鑊 、冒 白 刃 、亦 何 異 哉 。

問四　臣下が諫言しない理由を最も端的に表している語を五字以内で抜き出せ。

問五　本文中にはＡ信という言葉が三回用いられているが、それらはすべて同じ意味と見なせる。それは、誰が誰に何を信じてもらうことなのか。具体的に二十五字以内で記せ。

問六　傍線部⑦の「此」が指す内容を本文に即して三十字以内で説明せよ。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、問題に関連する箇所の送り仮名、返り点は省いてある。

羅公遠天宝ノ初メ侍ス二玄宗一ニ。A八月十五日夜、宮中ニ翫めデテレ月ヲ、曰ハク、陛下能ク従ヒテレ臣ニ月中ニ游バンヤト乎。乃チ取一枝 X 、向ヒテレ空ニ擲なグルニレ之ヲ、化シテ為ル二一橋一ト。其ノ色如シレ銀ノ。B請上同登。約ほぼ行クコト数十里、遂ニ至ル二大城闕一ニ。公遠曰ハク、此レ月宮也ト。有リテ二仙女数百一、素練寛衣、舞フ二於広庭一ニ。上前すすミテ問ヒテ曰ハク、此レ何ノ曲ゾ也やト。曰ハク、霓裳羽衣也ト。上密カニ記シテ二其ノ声調一ヲ、遂ニ回かヘルニレ橋ニ、C却顧、随歩而滅。旦ニ諭さとシテ二伶官一ニ、象リテ二其ノ声調一ヲ、作ル二霓裳羽衣ノ曲一ヲ。

（注）「羅公遠」…唐代の道士。　「天宝」…唐の玄宗の年号。

「玄宗」…唐の皇帝。　「伶官」…音楽師。

問一　傍線部Ａ「八月十五日」について、旧暦のこの日は何と呼ばれるか。その呼称（漢字二字）を記せ。

問二　空欄[X]には、植物名を表す漢字一字が入る。この植物は、中国では月に生えていると伝承され、科挙に合格することを「折[X]」ともいったことが知られる。このことは日本にも伝わって、菅原道真の母は道真の元服に際して「ひさかたの月の[X]も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」と詠んでいる。その漢字として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　梓　　ロ　桂　　ハ　桜
ニ　椿　　ホ　柳

問三　傍線部Ｂ「請上同登」を書き下し文にあらため、全文ひらがなで書くとどうなるか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　かみをこひおなじくのぼれる。
ロ　じやうよりこひおなじにのぼる。
ハ　あがりておなじくのぼらんをこふ。
ニ　うえにのぼるをおなじにせんとこふ。
ホ　しやうにおなじくのぼらんことをこふ。

問四　傍線部Ｃ「却顧、随歩而滅」はどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　振りかえると、歩くたびに仙女が姿を消した。
ロ　考え直して、歩むごとにその曲調を失った。
ハ　振りかえると、一歩進むごとに橋が消えていった。
ニ　考え直して、一歩を進めるたび明かりが減った。
ホ　振りかえると、歩数を重ねた分だけ月宮が遠のいた。

問五　末尾に記される「霓裳羽衣曲」の由来として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　羅公遠が月宮で曲調を習いおさめて帰るや、夜明けを待てず音楽師を急き立てて採譜させた。
ロ　月宮で聞いた曲調を覚えて帰った玄宗が、翌朝音楽師に命じてその曲調にならって作らせた。
ハ　仙女が羅公遠に秘蔵の楽譜を写させ、翌朝その楽譜を手に入れた玄宗が音楽師に伝録させた。
ニ　月宮で耳にした曲調を書きとめて帰った羅公遠が、翌朝音楽師にその曲調に模して作らせた。
ホ　仙女から曲調の奥義を授けられて帰った玄宗が、夜明けを待てずに音楽師に奥義を伝授した。

第四講

〈模範解答〉

一

問一　まことによろしくいふ〔う〕ものあるべし

問二　②　あへ〔え〕て　③　ゆゑ〔ゑ〕んなりと　④　あひ〔い〕ともに
　　　⑤　すなは〔わ〕ち　⑧　つひ〔い〕に

問三　与(下)夫赴(二)鼎鑊(一)、冒(中)白刃(上)、亦何異哉。

問四　懼死亡之禍

問五　臣下が皇帝に忠義と誠意をもって仕えていること。（二十三字）

問六　命の危険があり忠誠を尽くし諫言するのは難しいと理解したこと。（三十字）

二

問一　中秋　問二　ロ　問三　ホ　問四　ハ　問五　ロ

〈現代語訳〉

一

太宗が魏徴に尋ねて言うことには、「最近、朝廷の臣下がみな物事について議論しなくなったのは、どうしてか」と。魏徴がお答えして言うことには、「陛下は虚心に（臣下の意見を）受け入れている。本当に意見を言う者にはちょうどよいはずです。しかし古人が言うことには、『まだ信頼されていないのに諫めれば、自分を批判していると言われ、信頼されているのに諫めなければ、給料をもらうだけで職責を果たさない官僚と言われる』と。ただ人の才知と器量は同じではない。臆病でいくじが

ない人は、忠義の心と正直さを持っているが、言うことができない。親密でない人は、信じてもらえないことを恐れて言うことができない。官職にすがりついて失職を恐れる者は、自分の身に都合が悪いことが起こることを恐れて決して言うことができない。みな口を閉じて黙っていて他人に同調して逆らわないことで日々を過ごす」と。太宗が言うことには、「本当にそなたの言うとおりで、私は常にこのことを考えている。臣下が諫めようとすれば、すぐさま死刑という禍を恐れるだろう。罪人を処罰する刑具に向かうことと、敵の軍勢に突入することとには、何の違いがあるだろうか、いや、ない。だから忠義の心や節操のある臣下は、誠意を貫くことを望まない者ではないのであって、勇気を持って誠意を貫くことが、非常に難しい。禹〔＝伝説上の創始者〕が道理にあった正しい諫言を拝聴したのは、どうしてこれ〔＝命の危険があり忠誠を尽くし諫言するのは難しいと理解したこと〕でないことがあろうか、いや、理解したからだ。私は今心の中を開き、つよく諫める言葉を受け入れる。臣下のそなたたち、恐れて最後まで思う存分に発言しないでいることはないように」と。

二

羅公遠は天宝年間のはじめに玄宗皇帝に仕えていた。八月十五日〔＝中秋〕の夜、宮中で（名）月を鑑賞していて、（公遠が）言うことには、「陛下は私と一緒に月の中に行けますか」と。そこで（公遠が）桂の枝を一本取り、空に向かって投げると、（枝は）一本の橋になった。その色は銀のようだ。（公遠は）皇帝〔＝玄宗〕に一緒に（橋を）登ることをお願いした。数十里ほど行くと、そのまま大きな城門に着いた。公遠が言うことには、「これが月の宮殿です」と。仙女が数百人いて、白い練り絹のゆったりとした衣装で、広い庭で舞っていた。皇帝は前に進んで質問して言うには、「これは何の曲か」と。（質問された者が）言うことには、「霓裳羽衣です」と。皇帝はこっそりとその曲調を覚え、そのまま橋に戻ったが、振りかえると、一歩進むごとに橋が消えていった。翌朝、（皇帝は）音楽師に（曲調を）告げ、その曲調にならって、（音楽師が）霓裳羽衣の曲を作った。